The social welfare in OSAKA

大阪の社会福祉

2024年3月
826

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会　https://www.osaka-sishakyo.jp

能登半島地震 被災者・被災地への支援の輪

4面
被災者の思いを一心に！
石川県内の災害ボランティアセンターへの運営支援を開始

HB

私の住んでいる平野区は名前の示す通り平らで、山らしいものは全くない▼ところが近所に「城山」というバス停がある。もちろん山もなければ城もないところなのだ。不思議に思っていたら、室町末期の古地図に「喜連城」という名前があって、平野にも城が存在していたことが分かった▼隣接する八尾に「稲城」跡という碑が立っていて、これは物部氏が蘇我氏と戦った時の城跡とか。楠木正成が陣を敷いた神社とか、真田幸村が徳川家康と戦った時に休憩した場所だとか、近所には戦に関する遺跡がそれこそ山ほどある▼時代を問わず、都に近い河内は戦争だらけだったのだ。平らで河川の氾濫も多かったので、農業生産も盛んだったらしいが、大きな勢力がなかったこともあって、取り合いの格好の場だったに違いない▼そういえば近所にある赤坂神社。もともと村自体が赤坂村と言ったらしいが、足利尊氏が楠木正成を攻めたとき、現、千早赤阪村の「赤阪」と思われないように、字の一部を取り「六反村」に名前を変えたそうだ▼皆さんの近くにも歴史が息づいているはず。地域を愛するために名前の由来を調べてみるのも一つの方法かも。（石）

「大阪の社会福祉」はNHK歳末助け合い助成金を活用して発行しています。

都島区

新しくeスポーツを取り入れ、みんなで元気に、エンジョイ！

eスポーツで認知症・介護予防やつながりづくり

2月20日午前11時～正午に、中野地域にある中野福祉会館で「eスポーツ※」を通じた集いの場が開催されました。当日は12人が参加し、ラジオ体操でウォーミングアップをした後に、eスポーツを通じて身体と頭を活性化させながら、参加者同士でコミュニケーションを取り、楽しみました。

この活動は毎週火・金曜日に、開催しており、自分たちで準備から運営までおこなっています。どなたでも気軽に無料で楽しむことができ、他の地域からも参加者があり、賑わいを見せています。

▲まずはラジオ体操（第1～3）で、身体を活性化

生まれ育った地域に私ができることを！

この取組みは、昨年7月に区社協が大阪市福祉局の協力を得て開催したeスポーツ体験会に運営メンバーが参加したことがきっかけとなり、実施に至りました。参加された方同士が楽しむ新しい地域活動になるのではと思っていたところ、主要メンバーの一人がゲーム機を寄贈してくれたこともあり、9月から実施しています。コントローラーを手に持って、ボウリングやテニス、ゴルフなどができるゲームで、今回はボウリングを楽しみました。

運営メンバーの藤田さんは、「みんなで楽しみながら、認知症予防や介護予防、ストレス解消をしています。私は中野地域で生まれ育ったので、地域でできることはやっていきたいという思いで活動しています。”みんなと会うのが楽しみ“と参加された方に思ってもらえるよう、さまざまな内容を取り入れることで少しでも外に出る機会になってほしいと考えています。また、参加者が楽しんでくれているところを見るとうれしく、それが活動の原動力となっています。今後は、eスポーツでのボウリング大会の他にも、落語など高齢者が集まりやすい内容を企画し、外出する機会や人と関わってつながりができる機会を増やしていきたいです」と語りました。

▲eスポーツを通じて、アットホームな雰囲気で交流しました

体験会を開催し、実施に至るまで関わってきた区社協の小阪青空（せいら）第1層生活支援コーディネーターは、「体験会を開催するまでは興味をもってもらえるか心配でしたが、参加者が目を輝かせて楽しまれている姿を見て、eスポーツに大きな可能性を感じました。体験後、運営メンバーが地域の活動へ取り入れるスピード感とエネルギーには驚きましたが、活気のあふれる活動につながったのでうれしく思います。また、地域を超えた交流の場にもなっているので、eスポーツを通じた取組みからさらにつながりの輪が広がってほしいです。今後も地域住民の『こんなことがやりたい』という気持ちに寄り添い、できることを一緒に考えていきたいです」と話しました。

※eスポーツとは？

eスポーツとは、「エレクトロニック・スポーツ」の略で、広義には、電子機器を用いて行う娯楽、競技、スポーツ全般を指す言葉であり、コンピューターゲーム、ビデオゲームを使った対戦をスポーツ競技として捉える際の名称（文部科学省 ホームページから引用）

参加者の声

- 若い時にはまっていて、もうできないと思っていたボウリングができて、懐かしくうれしいです。
- 対戦なので、「負けたくない」と思って、つい熱くなりました。
- 違う地域ですが、声をかけてもらってバスに乗って参加しています。eスポーツが楽しいのと、皆と会えるのが楽しみです。
- もういいかと出かけるのが億劫に思う時もあるけど、道で会った時などに「待っているよ」と声をかけてもらえ、待ってくれているならと継続的な参加につながっています。

▲左から運営メンバーの森本さん、藤田さん、今城さん、区社協の小阪第1層生活支援コーディネーター

特集

活動者の広げ方のススメ3
活動している姿を見せ、魅力を伝える

地域福祉活動は、地域住民のつながり・いきがいづくりに寄与していますが、活動者の高齢化や減少により、活動の継続に不安を感じている地域や団体も多くあります。本記事では、新たな担い手発掘をめざして工夫をこらした取組みを紹介します。（過去の掲載では令和6年1月号、2月号参照）

城東区鴫野地域活動協議会 第一部会長の田中良直会長へインタビュー

今回はたくさんの地域活動を展開している鴫野地域の田中良直（なおよし）さんに地域活動に関わるようになった経緯や思い、新たな活動者を増やしていくための工夫などをお聞きしました！

地域で取り組まれている活動を教えてください。

城東区鴫野地域は高齢者食事サービスやふれあい喫茶のほか、「おもいやり喫茶（地域包括支援センターと森之宮病院による血圧測定や健康相談等あり）」「しぎのカーニバル（鴫野グラウンドで、模擬店や盆踊りをはじめ、音楽やダンスなどのステージイベントも楽しめるイベント）」などたくさんの行事を実施しています。

コロナ禍では感染症拡大を懸念していましたが、現在では、ほとんどの地域活動が再開し、なかでも、ふれあい喫茶では毎回約70～100人と多くの方が参加し、賑わっています。

田中会長が地域活動に関わるようになったきっかけを教えてください。

約30年前、こどもが小学生の頃に同じ地区のなかで「こども会」活動に関わり始めました。自分のこどもが私の活動している姿を見て、喜んでくれたのが嬉しく、これまでの活動継続につながっています。また、地域のこどもたちと関わり、楽しんでくれている姿を見られることも原動力です。

活動をするうえで大切にしていることはありますか。

暮らしている方が「安心安全のまち」と感じてもらえることを大切にして、ちょっとしたことでも気軽に相談できる関係づくりを心がけ、普段のつながりのなかで気になることがあればすぐに声をかけられる、そのようなまちになるように活動しています。

活動者を増やしていくために意識していることはありますか。

一回活動に携わるとずっと役員をしないといけないというイメージを持っている方が多く、共働きのためできないと言われることがよくあります。そうではなくて、「行事ごとで参加できる時に来ていただき、自由に楽しんでください」と伝えるようにしています。また、活動を通じて、同世代や同じ地域に住む方と横のつながりをつくってもらえるように意識しています。また、「こどもの安全見守り隊」活動や地域・学校の行事等で、こどもたちと顔を合わせて、私たちの活動を知ってもらうことで、将来大人になった時に自分たちがしてもらった経験から地域活動に協力したいと思ってもらえるように意識しています。

現在力を入れていることや今後の展望について教えてください。

令和2年には、コロナ禍で恒例の敬老会もできず、顔を合わすことが難しかったため、高齢（70歳以上）の方、約2600人を対象に「どのように過ごしているか」「困りごとはあるか」などのアンケート調査をしました。集計は一般募集をし、大学生を中心とした約50人の方に関わってもらいました。「困りごと」については約400人から記述での回答があったため、何かのカタチにして返したいとの思いで、区社協にも相談しながら、鴫野地域で有償ボランティア活動「しぎのたすけ愛の会」を立上げ予定です。初めての活動ですが、手探りですすめながら、いろいろなカタチで若い方も巻き込み、多世代で取り組んでいきたいと考えています。

▲田中会長（中央）、区社協の古賀愛望第1層生活支援コーディネーター（左）、春名雪衣第2層生活支援コーディネーター（右）

活動者を広げていくためのポイント

地域活動の魅力に気づいてもらえるよう、まずは気軽に参加を促す

- 活動に関わる前に持たれている負担感を軽減できるよう「行事ごとで参加できる時に来ていただき、楽しんでください」と伝える
- 同世代や同じ地域に住む方と横のつながりができるよさを知ってもらう
- 地域活動があることで、自分たちの家族がどこかで支えられていることを知ってもらう

若い方が将来地域活動を担いたいと思ってもらえるように

- 取組みを知ってもらえるように、地域・学校の行事などのさまざまな機会で学生と顔の見える関係づくりを心がけ、活動している姿を見せることで、将来自分たちも地域活動を担いたいと思ってもらえるようにする
- 高校生や大学生等にイベントで出演や運営、アンケート調査の集計など、いろいろなカタチで関わってもらえる機会をつくることで、地域活動に参画するハードルを下げる
- こどもたちに関わってもらうことで、子育て世代にも地域活動への魅力を感じてもらう

鴫野地域の主な活動（一部）

- ふれあい喫茶（第2・4日曜日）
- しぎのカーニバル
- 敬老会
- おもいやり喫茶（第1・3火曜日）
- 百歳体操（毎週火曜日）
- 町民大運動会

「大阪の社会福祉」はNHK歳末助け合い助成金を活用して発行しています。

被災者の思いを一心に！石川県内の災害ボランティアセンターへの運営支援を開始

令和6年 能登半島地震

1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」で被害を受けた石川県内の市町村社協では被災された方々が元の生活を早く取り戻せるよう、災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を開設しています。被災者・被災地の力になりたいという思いを持ったボランティアが、多数駆けつけており、被災者に寄り添いながら活動を展開しています。

大阪市・区社協では、近畿ブロックの社協とともに1月28日から石川県内の社協が運営する災害VCへ職員を派遣し、現地の社協とともに地域住民に寄り添いながら、災害VCに寄せられるニーズの聞取りや現地調査、ボランティアへのオリエンテーション、活動とのマッチングなどを担い、災害VCの運営を支援しています。

▲災害VCでのオリエンテーションの様子（2月7日）

石川県志賀町（しかまち）は最大震度7を記録し、2月末時点においても水道は全面復旧していないなど、町は甚大な被害を受けています。片付けもままならない状況で自宅や避難所で不安な生活を送る方がたくさんおられます。

今回志賀町へ近畿ブロックの第2クール（1月28日～2月3日）として、城東区社協の木下掌悟地域支援担当係長、第4クール（2月5日～11日）として、東住吉区社協の濵辺隆之包括支援担当係長と市社協総務課の植岡大登主事を派遣しました。

2月17日からは最大震度6強を記録した石川県七尾市に派遣先が変わり、第7クール（2月17日～23日）では、淀川区社協の小牧義孝地域支援担当係長と市社協地域福祉課の門脇健太主事、第8クール（2月21日～27日）では、旭区社協の河島連利地域支援担当主事を派遣しました。直近では、平野区社協の尾方俊祐見守り支援ネットワーカー管理者を第9クール（2月25日～3月2日）で派遣しています。

市・区社協として、3月末までの派遣を決定しており、近畿ブロックをはじめ全国各地社協とともに、引き続き支援活動に取り組んでいきます。

また、大阪からできる被災地支援として、災害義援金も引き続き受け付けています。

第2クール：1月28日～2月3日
城東区社会福祉協議会
地域支援担当係長
木下 掌悟

災害VCには災害ごみの片付けや荷物の運び出しなど新たな相談が毎日多数あり、十分に対応することが難しい場合もありました。また、ボランティア活動時に使用する軽トラックの台数が不足している・災害ごみの集積所が混雑し活動が思うように進まない等の課題に対して、他団体や企業とも連携し、可能な範囲で少しずつボランティア活動をすすめています。また、企業の協力により、技術的なニーズに対応できることもあり、復興に向け支えとなっています。

第4クール：2月5日～11日
東住吉区社会福祉協議会
包括支援担当係長
濵辺 隆之

災害VC運営では、QRコードでのボランティア受付やタブレットを使った現地調査などICT化がすすめられ、ニーズの整理やボランティアとのマッチングの効率化が図られていました。しかしながら、地元の社協職員も被災しており、不安な生活と連日の業務の疲れが蓄積されてきているように感じました。彼らを支えようと企業の社員やNPOのスタッフなどが継続的に活動に加わるとともに、災害ごみの回収における行政との連携や、ニーズを取りまとめる区長（地域役員）の存在など、社協と行政、地域が一体となって取組みがすすめられていました。

令和6年 能登半島地震災害義援金募集中

みなさまのあたたかいご支援、ご協力をお願いいたします。

〈受付期間〉
令和6年3月29日㊎まで

〈銀行口座〉
りそな銀行 上六支店（普）6804741

〈名義〉
大阪市社協 義援金口
（オオサカシシャキョウ ギエンキングチ）

※詳細については
大阪市社協 総務課 06-6765-5601まで

第4クール：2月5日～11日
大阪市社会福祉協議会
総務課
植岡 大登

災害VC運営に携わる職員・ボランティアが確固たる信念を持ちながら活動している姿が印象的でした。派遣職員としては、地元の住民や社協職員の方々の慣れない生活・業務による体調面の変化に気を配りながら、気持ちに寄り添うことを心がけて活動しました。地域住民のニーズを地域の代表者がまとめて把握している場合もあるので、連携して動くよう努めました。

▲現地調査の様子（2月6日）

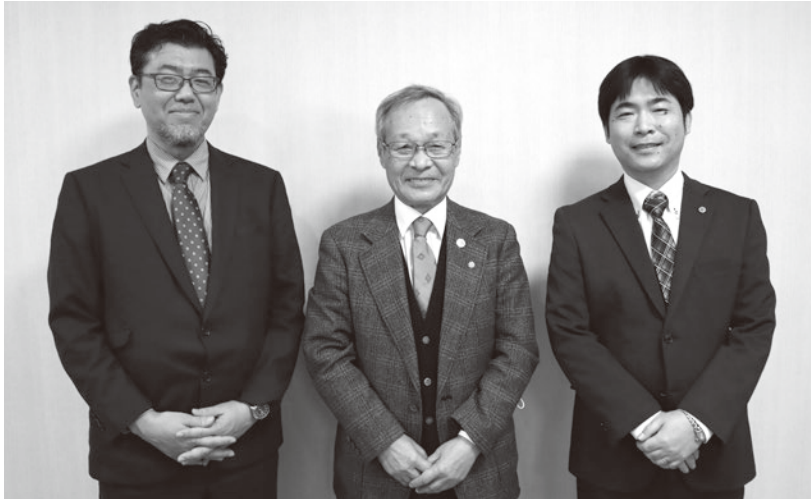
西成区

地域防災力の向上をめざして 今できることを考える

～西成区地域福祉フォーラム～

岡山県総社市の取組みから学ぶ

西成区社協は、1月20日に区民センターで「西成区地域福祉フォーラム　みんなが助かる！みんなで助ける!!～西成区の防災力の向上をめざして～」を開催しました。主催は西成区地域福祉推進会議（事務局／区社協・区役所）で、進行役にオフィス園崎代表の園崎秀治さんを迎え、講師の岡山県総社市下原・砂古自主防災組織副本部長の川田一馬さん、総社市社協地域福祉課地域福祉係長の大柳堅司（おおやなぎけんじ）さんから講演がありました。


▲左から園崎さん、川田さん、大柳さん

総社市下原地区では、平成30年7月に起きた西日本豪雨災害で、要配慮者30人を含む350人が全員無事に避難できたという経験があります。その背景には、東日本大震災の翌年、平成24年から自主防災組織を設立して毎年避難訓練を実施し、住民同士のつながりづくりを大切にしてきたという経過がありました。訓練は世帯台帳をもとに作成した安否確認表を用いて、夜間や雨の日も含めて、災害時を想定して積み重ねていました。

川田さんは、発災時から避難に至るまでの経過について、過去に受けたテレビ取材の映像も用いて説明しました。発災当日は、自主防災組織で夕方頃から大雨特別警報の発令を見越して集まり、避難誘導に向けて準備していたところ、地域内の工場で爆発が起き、工場から1㎞先の建物の扉やふすまが倒れ、窓ガラスのほとんどが割れ、けが人も多く出た惨状となりました。二次爆発に備えて午前0時30分頃に避難指示が出たため、班長が中心となり住民に避難を呼びかけ、連絡がつかない家には直接訪問し、安否確認表を用いて一人も漏らさずに確認していきました。日頃から、世帯状況や寝ている部屋などを把握していたことで、スムーズに避難誘導ができました。爆発の影響を受けて車が壊れ、移動手段がない人は、市役所がワゴン車を出し、避難所まで往復しました。住民の避難が完了したのは明け方で、数時間後には、地区一帯の家の屋根上まで水に浸かっていました。

学んだことを日頃の取組みに活かして

川田さんは、「平時から訓練してきたことを一人ひとりが応用させたからこそ全員無事で逃げることができました。また、日頃から地域、行政、社協がつながっておくことが必ず有事に役立つと思います。一人で避難できない人に焦点を当てて地域全体で取り組むことで、避難訓練ではこどもたちが車いすを押すという流れが自然にできています」と話しました。

発災後まもなく、総社市社協は災害ボランティアセンターを立ち上げ、全国から集まってくるボランティアをマッチングし、住民と一緒に自宅を訪問し困りごとがないか聞き取りをしていきました。また、市内の高校生が「自分たちにも何か役に立てることがないか」と、ボランティアとして延べ約3300人が集まりました。

大柳さんは、「たくさんの学生が集まり活躍したのは、日頃の福祉教育の成果だったと思います。学生には物品の仕分けや応援メッセージの記入など、できることをしてもらいました。日頃から、学生目線でできることをしてもらえるように災害時だけではないつながりづくりの大切さを伝えていきたいです」と話しました。

今回企画をした区社協の沈（しむ）仁玉（いのたま）見守り相談室管理者は、「以前、テレビで総社市の自主防災組織の取組みを拝見し、ぜひ川田さんに講演をお願いしたいと考えていました。平常時からつながりをつくることの重要性を感じていただけたのではないかと思います。参加者からは、”日頃のご近所の見守り活動の大切さを改めて感じた“、”各地域の防災に関する取組みを共有したい“という意見があったので、今後検討していきたいです」と思いを語りました。

▲西日本豪雨災害の様子、次世代につないでいきたいと作成した下原地区の「記憶誌」をフォーラムを開催した会場で展示

「大阪の社会福祉」はNHK歳末助け合い助成金を活用して発行しています。

一水会・区社会福祉施設連絡会合同学習会

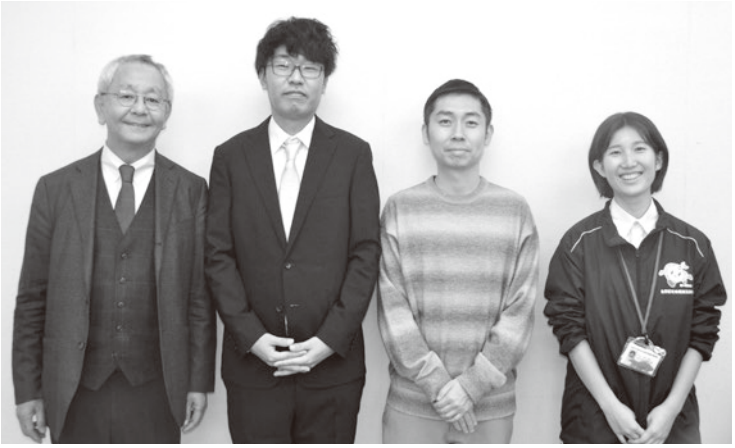
社会福祉施設の公益的な取組みの推進

―連携・協働による場づくり・つながりづくり―

大阪市社会事業施設協議会（事務局：市社協）では、6団体（児童・保育・高齢・生活保護・地域・障害）の各施設を対象に、（かつて毎月第一水曜日に開催していたことから）「一水会」という学習会を、毎年開催してきました。

近年は、大阪市社会事業施設協議会と市社協による共催で、各区社会福祉施設連絡会（事務局：各区社協）との「合同学習会」としており、今年度は2月14日にオンラインで開催し、施設役職員、社協職員ら約200人が参加しました。

今回は、地域における公益的な取組みのなかでも、施設と社協・地域住民等の連携・協働や、具体的な生活課題への気づきに基づく取組みに焦点を当て、講義と実践報告を通じて共有しました。



▲左から：新崎先生、柿の木福祉の園 川畑さん、浪速松楓会 鯉谷さん、生野区社協 西本さん

相互実現型の自立へ

講師の「福祉と教育の実践研究所SOLA」主宰の新崎国広先生からは、社会福祉施設の公益的な取組みは、利用者・施設・地域住民・ボランティアそれぞれにメリットがある「四方よし」の活動であり、これからの施設職員は、施設のなかだけではなく、地域とつながっていく取組みが必要であること、また、施設内で課題を解決する「自己完結型自立」ではなく、地域や関係機関と連携し、それぞれの得意分野を活かして「相互実現型自立」をめざしていくことが大切であるとの話がありました。

トライアル・アンド・エラー

講義に続き、2つの実践報告があり、新崎先生は、両実践の共通点として「トライアル・アンド・エラー」という言葉を示し、浪速松楓会の取組みでは失敗をあきらめずにその要因を分析して次の取組みに活かし、柿の木福祉の園の取組みでも失敗の経験から取組みの目的を当事者目線に捉え直しており、両者とも試行錯誤しながら少しずつ地域と協働していく様子が伺えました。こうした取組みの根の部分には、目の前の困っている利用者や地域の課題を〝なんと

生野区　施設での地域の男性の居場所づくり

当法人が運営する特別養護老人ホーム寿幸苑がある生野区は高齢化率が高く、コロナ禍で飲食店も次々と閉店。こうしたなか、施設で喫茶を開催するなど地域の高齢者の方々が集える機会を提供してきましたが、男性の参加者が少ないことが気になっていました。そこで、生野区社協や地域の方々と話し合い、他都市の事例も参考にして、男性を対象に落語や映画会、料理教室などのさまざまな取組みを企画してきました。結果、申込み者が1人という時もありましたが…参加者が少なくてもあきらめず、これからも試行錯誤しながら、男性の特性をふまえた場づくりを継続していきたいです。

社会福祉法人浪速松楓会
業務執行理事
鯉谷（こいたに） 雅至（まさし）さん

寿幸苑から「地域ニーズに合った地域貢献をしていきたい」と相談があり、一緒に検討しました。区社協として地域別に実施した男性の集いの場に関するアンケート結果を伝えたり、地域の方々と一緒に考える場をつくったりすることで、施設の思いと地域のニーズをすり合わせていきました。施設は地域のなかの大切な拠点であると考えています。地域に施設のことをより知ってもらえるよう区社協としても工夫し、区内の各施設と地域住民が一緒に取組みをすすめられるようにはたらきかけていきたいです。

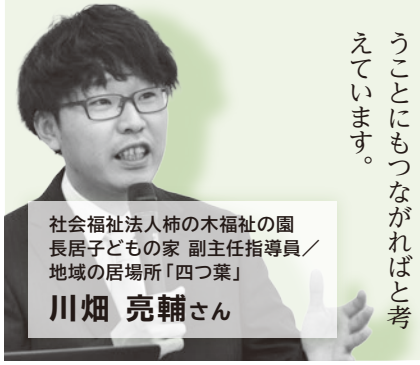
▲さまざまなテーマで男性の居場所を開催

社会福祉法人
大阪市生野区社会福祉協議会
第1層生活支援コーディネーター
西本 恵歌さん

住吉区　地域の居場所「四つ葉」経緯と実践～当事者の困りの声から生まれた活動～

新型コロナウイルス感染症の影響により学校が一斉休校となり、行き場を失った中学生の居場所として、日中の受入れを始めました。その後、休校は明けたけれど、学校に行きづらくなった小学生も受け入れ、学童保育の機能を広げた支援として「四つ葉」を開始しました。当初は不登校となったこどもが何とか学校に通えるようにと、一緒に登校したり、保護者と一緒にどうすれば学校に戻れるのかを考えましたが、こども自身の思いが後回しになってしまい、学童に来ることすら嫌になり、居場所を奪ってしまったこともありました。この失敗から四つ葉の目的を「自分が自分らしくいられる場所」とし、活動を継続してきました。その後、学童保育利用者に限らず、不登校などを理由に居場所がないこどもたちが大勢いるのではないかと考え、四つ葉を法人の事業として正式に位置付け、広く地域のこどもたちを受け入れることになりました。現在では、朝から児童の受入れをしつつ、さまざまな団体と協力し、施設外の活動への参加や中学生以上の居場所活動なども実施しています。今後は区内で不登校児支援に取り組む団体との連携強化や、卒業生との関わりを続けることで福祉の仕事を身近に感じてもらうことにもつながればと考えています。

▲地域のお祭りに「四つ葉」として出店


社会福祉法人柿の木福祉の園
長居子どもの家 副主任指導員／
地域の居場所「四つ葉」
川畑 亮輔さん

かしたい“という“パッション“や“ミッション“があり、その実現のための見通し「ビジョン」を他者へと伝えることで、連携・協働した「アクション」へとつながります。「連携・協働の取組みを進めるなかで、この4つのションを大事にしてほしい。また、施設の方々もどうすればよいか悩んでいるのであれば、地元の区社協に相談しながら取り組んでいけばよいのではないか」とのコメントがありました。

参加者アンケートから

- 公益的な取組みへのイメージが変わった。まず取り組もうとする姿勢やその後押しをしてくださる法人も職員の方もすばらしいと思った。（施設職員／児童・障害）
- 今回は社会福祉施設と地域や社協の関わりに可能性を感じることができた。この学びを事業に取り入れていきたい。（社協職員）

風をよむ　異次元の少子化対策と「支援金制度」

大阪公立大学大学院生活科学研究科 教授　所 道彦

異次元の少子化対策が進められている。政府の「こども未来戦略」と「加速化プラン」が発表され、これから国会での議論が本格化する。児童手当や育児休業給付の拡充策などに充てるために、医療保険の保険料に上乗せして財源（支援金制度）として3・6兆円を確保する案が注目されている。

今回の案は、社会保険制度の枠組みで財源を確保し、特定の施策に限定して拠出する形になっている。「新しい分かち合い・連帯の仕組みの構築」という言葉が使われているが、財源確保の方策を限定し、新たな役割を「後付け」することで、社会保険制度の本来の趣旨や全体像が見えにくくなるのではないか。もちろん、プランに示されている児童手当や育児休業給付、保育施設の利用拡大などは重要であり、改革を進めるべきであるが、税制について十分検討せずに新たな施策を展開することには疑問を感じる。高齢者施策も含めた社会政策の全体像の中で再分配と子育て支援策を検討すべきであろう。狭い制度の枠組みで議論するほど個人の損得勘定につながりやすい。また、子育て支援策がどのようなプロセスを経て国民全体への利益につながっていくのか、国の将来にとってなぜ必要か、説明する場面での政治家の力量が問われている。

そもそも、子育て支援を少子化対策に位置づけることが誤解を招くと言える。社会政策によって直ちに少子化に歯止めがかかることは期待しない方がよい。逆に、出生率が改善すれば、子ども・子育て支援を打ち切るつもりなのだろうか。少子化の進行にかかわらず、若者や将来世代に投資することは重要である。将来への投資を怠った組織は立ち行かなくなるが、国家も基本的に同じだろう。

「大阪の社会福祉」はNHK歳末助け合い助成金を活用して発行しています。

大阪の社会福祉 vol.826
令和6年3月発行（毎月1回発行）　発行／社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会　編集・発行人／吉村 浩
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町12-10（大阪市立社会福祉センター内）　Tel.06-6765-5601　Fax.06-6765-5605　https://www.osaka-sishakyo.jp

取組みのぞき見　社会福祉施設の地域における公益的な取組みをご紹介 3

自由な発想で広がる「ごちゃまぜ」で「ゆるふわ」な居場所

社会福祉法人育徳園は、阿倍野区で保育・学童・高齢者施設を運営しています。創設者の早川徳次の思いとして「幸せを分ける」という言葉がありますが、その思いから「誰もが立ち寄れる場所」をつくれないかと令和４年10月、同法人のコミュニティーセンターに専任職員を配置し、「コミュニティーひろば」を立ち上げました。当初は訪れる人が少なかったものの、子育て関連や認知症当事者・支援者の団体、近隣店舗などとの出会いから多彩なコラボ企画が実現。今では毎回100人ほどが来場し、約10店舗が出店する定番企画「ごちゃまぜマルシェ」のほか、カフェ、ワークショップなど、月20件近くのイベントを開催しています。

コンセプトは「ごちゃまぜ」。スマホ相談会では大学生が高齢者に操作方法をサポートしたり、マルシェでは有名パン屋と障がい者作業所のパン販売が横並びで出店したり、カフェの日には認知症がある高齢者が店員を務め、訪れたこどもの相手をしながら、その間にお母さんは同時開催の美容鍼でリラックスする光景も。「こんなことやってみたい」と「ちょっと行ってみようかな」をつなぎ、世代も背景も異なる人たちがゆるやかに混ざり合う場となっています。

▲高校生ボランティアが講師の英会話教室

▲育徳コミュニティーセンター所長の廣谷直樹さん（左）と専任担当者の阿南香さん（右）

取組みのポイント

- 法人の理念・信頼感を土台に、自由な発想で展開
- 場の趣旨を共有し、企画・出店者同士もつながる
- チラシとSNS、両面からねばり強く情報発信

社会福祉法人 育徳園　育徳コミュニティーセンター
大阪市阿倍野区阪南町5-15-28　TEL 06-6621-1901

公式LINE（左）は500人以上、Instagram（右）は1300人以上が登録（令和6年2月時点）

第70回 ライオンズクラブ 335-B地区年次大会

入場無料

展示等を通して、被災地について知り、自分や家族、大切な人を守るための防災を身近に感じ、学んで、身につけませんか？

開催日時　令和6年 4月13日(土) 10:00~18:00

開催場所　梅田スカイビル 1階「ワンダースクエア」（大阪市北区大淀中1-1-88 梅田スカイビル）

アトラクション
- 能登半島地震 復興支援チャリティイベント
- 復興支援物産展ブース 等

主　催　ライオンズクラブ国際協会335-B地区
協　力　社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上
三井住友海上の安心
GK
クルマの保険　すまいの保険　ケガの保険
www.ms-ins.com